

# 比較熱帯デルタ稲作農業論の論点 ならびにベトナム・メコン河デルタにおける水稲作方式

山 崎 亮 一\*

The focal points of a comparative study on rice farming in tropical deltas  
and the development of rice farming systems in the Mekong Delta of Vietnam

Ryoichi YAMAZAKI  
(June 2005)

## 目 次

- I はじめに
- II 比較熱帯デルタ稲作農業論の論点
- III メコン河デルタにおける水稲作方式
  - 1 メコン河デルタの風土
  - 2 国家事業としての水稲作生産力形成過程小史
  - 3 フランス植民地期から1960年代までの水稲作方式
    - (1) デルタ上流部
    - (2) デルタ中流部
    - (3) 大凹地地域
    - (4) デルタ下流部沿岸複合地域
  - 4 1970年代以降の水稲作方式
    - (1) デルタ中流部カントー省オモン県の近代品種2-3期作
    - (2) デルタ上流部ドンタップ省ドンタップ平原の近代品種2期作
    - (3) 海岸平野部ロンアン省ホーチミン市近郊の近代品種+在来品種の2期作
- IV 結 論

## 要 約

The present author intends to conduct a comparative study on rice farming in two tropical deltas, the Mekong Delta of Vietnam (the Indochina Peninsula) and the Niger Inland Delta of Mali (West Africa). This paper has three objectives as follows, which are some of the objectives of this comparative study:

-To explain the focal points of the comparative study on rice farming in tropical deltas,

-To obtain a general view of the actual configuration of the rice farming systems in the Mekong Delta of Vietnam and the formative process of these systems after the French colonization period,

-To examine factors of disparity observed in the agricultural productivity between the Mekong Delta of Vietnam and the Niger Inland Delta of Mali.

This paper is composed of five chapters as follows:

- I Introduction
- II The focal points of a comparative study on rice farming in tropical deltas
- III Rice farming systems in the Mekong Delta of Vietnam
  - 1 Natural features of the Mekong Delta
  - 2 Short history of the development of rice farming systems in the Mekong Delta
  - 3 Structure of the rice farming systems during the period from the French colonization to the 1960s
  - 4 Structure of rice farming systems after the 1970s
- IV Conclusion

## I はじめに

筆者は、メコン河デルタとニジェール河内陸デルタとを比較する熱帯デルタ農業論を意図している(注1)。なお、メコン河デルタの地理的広がり、現在のベトナムとカンボジアの二つの国にまたがっているが、筆者の比較熱帯デルタ農業論の対象は、

\* 酪農学園大学酪農学部農業経済学科農業市場論研究室  
Agricultural Marketing Laboratory, Department of Agricultural Economics, Rakuno Gakuen University, Ebetsu, Hokkaido, 069-8501, Japan

このうち面積がより大きいベトナム領である。

本稿ではこのような比較研究の一部を構成する作業として、以下のことを行う。第1に、本比較研究の論点を示す。第2に、メコン河デルタにおける水稲作生産力の今日的存在形態と植民地期以降におけるその歴史的形成過程を、既存文献と筆者の見聞(注2)をもとに概観する。なお、ニジェール河内陸デルタにおける水稲作生産力の今日的存在形態については別稿(山崎[28])を準備している。第3に、ニジェール河内陸デルタとメコン河デルタの間に今日認められる水稲作生産力の格差と表現してもよい相違について、その要因となる背景を考察する。

## II 比較熱帯デルタ稲作農業論の論点

この二つの巨大なデルタは、インドシナ半島と西アフリカとの間に横たわる巨大な地理的距離にも関わらず、自然条件、及び19世紀末以降に経験してきた歴史的経緯の面で、いくつかの共通点を持っている。そこで、本比較研究の視点を巡る議論を、二つのデルタの共通点を示すところから始めよう。両者の共通点を示すことは、同時に、これらを比較する論点を明らかにすることにつながるからである。一般に、比較研究を行うためには、比較を可能とするような両者に共通の場を設定する必要があるが、二つのデルタの共通点はこのような共通の場となりうるであろう。

第1の共通点は、自然的風土とそれに規定された農耕様式の基礎と関わる。すなわち、二つのデルタは、ともに熱帯の水稲作地域である。両者は雨季と乾季の明確に分かれる二つの季節を持ち、雨季の後半には広大なデルタのほぼ全域が氾濫水と雨水によって冠水する。冠水したデルタは天然の水田となるため、両地域では太古から水稲作が営まれてきた。この第1の共通点は、二つのデルタを水稲作に視点を据えて比較する可能性を示している。しかも両者の水稲作は、熱帯デルタの氾濫原という多分に共通するところの多い自然的風土の下で行われてきたものである。したがって、自然的風土の影響を一般に強く受ける水稲作の方式にも、この二つのデルタの間には多分に共通するものがあるのではないかと推測されるのである。そこで、二つのデルタの水稲作が、今日、いかなる方式で行われているのか、そしてこの点で、両者の間に共通する要素と相異なる要素があるのか、こういったことが先ず問題となろう。もっとも二つのデルタの自然条件には、見過ごすことのできない大きな差異が存在することもまた事実である。その中でもここで記しておく必要があるの

は、両者の間に見られる年降水量の相違である。それは、ニジェール河内陸デルタの平均数百ミリに対し、メコン河デルタでは千数百ミリに達する。このことは、結局のところ両地域の原風景の違い、すなわち一方の半砂漠と他方の森林の発達、をもたらすことになるが、このような原初的な自然条件の相違が両地域の生産力形成過程のあり様に大きく関わる点は、後に結論部分で述べよう。

ところで、ここで水稲作方式とは、人間的主体が地域の自然条件に対し水稲栽培を通して歴史的に格闘してきた結果として編み出してきたものであり、栽培品種、作型(作期・栽培暦)、栽培方式、農具、灌排水施設・畦畔等水田構築物の中に骨化している。水稲作方式のこれら構成要素は、農業生産力の原生的要素たる土質、気候、洪水、地形、及び農業生産力の主体の一社会的要素たる農民的熟練と農民の組織的活動、とは別に農業生産力の客体の一社会的要素を構成している(注3)。

結論を先取りするならば、二つのデルタの水稲作方式には、現時点で大きな相違が認められる。そこで、先述のように両者の自然的風土に多分に共通面が多いとするならば、水稲作方式におけるこの相違は、先述のなお残る原初的な自然条件の相違を一般的基礎としながらも、むしろ、人間的主体の側からの自然環境に対する働きかけ方、及びその歴史過程に見られる、二つのデルタ間の相違を大きく映し出している、とは言えないだろうか。そこで、二つのデルタの間に現時点で見られる水稲作方式の相違を、この相違の事実の単なる確認にとどまらずに、さらにその要因や背景にまで立ち入って究明しようとするならば、人間的主体の自然に対する働きかけ方とその歴史過程における両地域の相違、さらにはその背景にある原初的な自然条件の相違にまで考察を進めなければならないことになる。

ところで、ここまでの叙述の中では、単に、水稲作方式の形成過程における人間的主体の働きかけ、と述べてきたが、これも次のように分析して理解されなくてはならない。すなわち、国家や植民地権力による、主に大規模インフラ構築の形をとって進められる、上からの生産力形成過程と、それに対する下からの農民的対応=農民的生産力形成過程である。そして、今日、両地域で見られる水稲作方式は、生産力形成過程におけるこの二つの側面が織りなしてきた、歴史的相互作用の産物としてとらえることができるのである。

なお、二つのデルタの間には、今日の水稲作生産力のあり方に大きな影響を与えている19世紀末以

降の時期について、上からの生産力形成過程にある種の共通性を認めることができる。そこで、二つのデルタの共通点をめぐる考察の第2点目としてこの点を見よう。

19世紀末から20世紀前半にかけて、二つのデルタは、ともにフランス帝国の熱帯植民地であった。フランスによる植民地農政は他の欧州列強によるものと同様にインフラ建設ならびに輸出向け作物栽培基地建設の形で進められたが、そこにはフランスによる熱帯植民地建設としてのある種の共通する特徴を認めることができる。その共通性とは、運河開削と農地開発、さらには現地人の入植を梃子とする農業開発が、両地域でこの時期一貫して進められていた、ということである。このような、フランス植民地期の農業開発のあり方は、両地域における独立後の農業開発のあり方にも強い影響を及ぼしており、実際、そこでは独立後の農業開発が、植民地期に敷かれたレールの延長線上で展開することになる。

しかし、両デルタの植民地期農業開発のあり方には、見過ごすことができない相違点もまたいくつか存在する。第1に、メコン河デルタの運河建設と農地開発は、本格的に展開するのはフランス植民地期以降ではあるが、実はその以前から、すなわち19世紀前半のグエン朝時代には既に始まっていたのである。第2に、フランス植民地期の輸出向け農業の主な目は、経済圏として見たフランス帝国内における両デルタの位置づけの相違を反映して異なっており、メコン河デルタの米に対して、ニジェール河内陸デルタでは綿花であった。しかし後者でも、植民地期に綿花栽培用に建設された巨大な水利インフラが、1960年のマリ国独立後には、結局は水稲作目的に利用されるに至っている。第3に、フランス植民地期のこのような農業開発は、メコン河デルタではドンタップ平原など一部の地域を除いてかなり広い範囲で展開したが、ニジェール河内陸デルタでは「死んだデルタ」と言われる一部の地域で行われたにすぎず、他の部分のほとんどは、今日に至るまで未開発のまま残されているのである。

このように、二つのデルタの間には、19世紀以降の開発の歴史過程に見ておけることのできない相違があるものの、ともに、フランス植民地期の農業開発が運河建設と農地開発を重要な要素として展開しており、しかも独立後の開発もその影響を強く受けて展開してきている、という点で共通している。そこで、運河建設と農地開発を軸にすえながら、19世紀末以降の上からの水稲作生産力形成過程を、二つのデルタの間で比較考察することが可能である。そし

てさらには、このような上からの水稲作生産力形成過程への農民的対応＝下からの水稲作生産力形成過程についても、運河建設と農地開発への農民的対応を軸に、二つのデルタの間で比較考察することが可能である。

次に、このようにして歴史的に形成されてきた水稲作生産力が、今日、どのような形で担われているかが問題となる。すなわち、水稲作生産力における担い手層の、今日的な存在形態の解明の問題である。一般に、水稲作生産力の担い手層は、与件としての経済環境に対する農民的対応の中から生み出されてくるものである。与件としての経済環境にうまく適応し、その中で水稲作生産力を発展させている階層こそが生産力の担い手階層と見なされるであろう。そして実は、近年のマクロ経済環境に、二つのデルタの間で、ある種の共通性を認めることができるのである。そこで、次にこのことを、両デルタの第3の共通点として示そう。

すなわち、二つのデルタでは、ともに独立後の一時期に社会主義的統制経済の時期を経験したが、近年、市場メカニズムを大幅に取り入れた経済システムへと、マクロ経済の仕組みが大きく転換してきている。ニジェール河内陸デルタのマリ国は、独立直後に中国を手本とする社会主義体制を標榜したが、経済問題が深刻化する中で早々にフランス・フランス圏に復帰する。その後、1968年にはクーデタによって時のケイタ政権が転覆し、社会主義的な1960年憲法は廃止される。1980年代後半にはIMFと世界銀行に主導された構造調整政策が始まり、公営企業解体、米穀流通と米価の国家管理の撤廃を通じて、統制経済色が一掃される。一方のベトナム・メコン河デルタでは、1975年の南北統一後に北ベトナムをモデルとした社会・経済の社会主義的改造が強力に押し進められた。しかし、そのことはこの地域の農業生産に混乱と停滞をもたらした。そのため統制色は1980年代を通じて徐々に薄められてゆく。そしてついに80年代末以降のドイモイ政策のもとで、多くの集団農場が解体されてその土地が農民に配分され、農民による農地の長期保有が認められた。さらに管理米価が撤廃されて市場メカニズムを大幅に取り入れたマクロ経済の仕組みへと大きく転換してゆく。

そこで、このように市場メカニズムが大幅に取り入れられたマクロ経済環境のもとにおける農業構造の変動と、両地域におけるその差異を明らかにし、そこから農業生産力の担い手層の今日的な存在形態とその両地域の相違を明らかにすることが問題となる。

なお、ここで農業構造問題という用語について少し解説しておく必要がある。先ず述べなくてはならないのは、この言葉には従来から実に多様な内容が盛り込まれてきたという点である。しかし、本比較熱帯デルタ農業論では、先に見た水稲作方式の問題の他には、農地規模別農家構成とその変動、さらには生産力担い手層の析出の問題、に重点を置いた理解を採用する。そして、農業構造の他の問題側面、すなわち、土地市場、就業構造、労働市場、農業収支、経営組織(複合化の問題を含む)、農民の組織的行動の問題、は、農地規模別農家構成の変動の問題を取り扱うのに必要な範囲で議論の対象とする。ここで農地規模別農家構成とその変動に議論の重心を置くのは、水稲作地域では、農家の生産力格差と蓄積格差がこの点に収斂してくると考えられるからである。そしてここでの筆者の関心は生産力担い手層の析出にあるのだから、このような重点を置いた農業構造問題理解をするのは妥当であろう。なお、ここでなぜあえて農地規模別農家構成の問題+生産力の担い手問題、と言わずに農業構造の問題と言っているかという点、農業構造の中に含まれる上他の問題側面も、農家構成や生産力担当層の解明に必要な限りで論及しようとしているからである。

本節で述べた本比較熱帯デルタ農業論の論点とは、第1に、水稲作生産力の歴史的形成過程と今日的存在形態の問題であり、そして第2に、マクロ経済が市場メカニズムを取り入れる方向へと大きく転換してきている状況のもとでの、農家諸階層の動向であり、その中から生み出されてくる生産力の担い手階層の問題である。

こういった全体的議論の部分作業として、次節では、メコン河デルタにおける水稲作生産力の歴史的形成過程とその今日的存在形態を概観する。

### III メコン河デルタにおける水稲作方式

#### 1 メコン河デルタの風土

水稲作生産力が地域の自然条件に対して人間的主体が水稲栽培とインフラ構築を通じて歴史的に働きかけてきた結果として編み出されてきたものであるとしたならば、メコン河デルタの水稲作生産力に関する考察は、先ず、この地の風土の描写から始めなくてはならないであろう。

メコン河デルタは、東南アジア最大の河川メコン河(全長4,800 km)が、南シナ海に大量の土砂を沈殿させて作りあげた面積530万haの大デルタであり、北緯8-11度に位置する。カンボジアのプノンペンがデルタのほぼ頂点にあたるが、全面積の3/

4に相当する390万haがベトナム領に属する。モンスーン・サバンナ気候帯に位置し、年間降雨の9割が5-11月に集中する。年平均気温は27度である。

しかしデルタ内の自然条件には、地域的にかなりの多様性が見られる。先ず、年平均降雨量は1,500mm程度とされるが、地域差が大きく、南西部の2,000-2,500mmに対し、北東部は1,000-1,200mmと少ない。第2に、土壌は沖積土が広がる一方で、ドンタップ平原などの低湿地には酸性土が多い。第3に、沿岸部では乾季に作物が土壌塩分や河川・運河を遡上してくる塩水の被害を受ける。第4に、デルタの平均標高は0.8mと低いので、雨季の後半になると河の氾濫と降雨により浸水する地域が多いが、洪水の水深は地域によって大きく異なり、上流部では3m以上に達する一方で、沿岸地帯は洪水にならない。第5に、メコン河の水位は季節変動の他に南シナ海の潮汐によって日変化し、日に2回の上げ潮の時期には河川の水位も上昇するが、その影響は河口から200km離れたデルタの上流部にまで及ぶ。この日変化への農民的対応が、潮汐を利用した独特な灌漑方式を編み出してきた点には後に見る通りである。

メコン河デルタにおける水稲作生産力の形成過程は、降雨、土質、洪水、潮汐の影響、塩分遡上の面でこのように多様性を持つデルタの自然条件に対する、農民と国家または植民地権力による働きかけの過程である。そしてその結果としての水稲作生産力のあり方にも、自然条件の多様性に規定された地域的多様性を認めることができる。

先ず、上からの生産力形成過程を概観しよう。

#### 2 国家事業としての水稲作生産力形成過程小史

メコン河デルタで国家事業としての水稲作生産力形成過程を問題にしうるのは、19世紀に入ってからである。というのも、現在のベトナムの支配的民族であるキンは、既に17世紀からメコン河デルタに北部から移住し始めたものの、キンが国家事業に奨励されてデルタに移住し始めたのは19世紀以降のことだからである(高田[19])。19世紀初頭に成立したグエン朝は、トアイハ、ビンテの幹線運河を、主に漕運を目的として開削し、屯田兵(*don dien*)、民間人の開墾団を組織して、入植を推し進めた。このように、この時から既にデルタ開発は運河開削を軸に、開墾、入植事業を合わせて進められていたが、その後も一貫して運河開削はデルタ開発の諸事業の中で根幹をなしてきた(第1図)。掘られた運河は、①漕運、②排水、③灌漑のために用いられてきたが、

運河に託された機能の重点は以下に見るように時代によって異なっている。

デルタ開発が飛躍的に進展するのは1860年代以降のフランス植民地時代、特に20世紀初頭である。この時期、コメに対する外需の増大を背景に、デルタでは漕運と排水を目的とした運河の開削を通じて水田開発が積極的にすすめられ、大凹地地域を中心にその面積は短期間に飛躍的に拡大した。1888年に75万haであった水田面積は、1931年には213万haにこの間に3倍になった(注4)。

しかし、開墾地は深刻な土地問題を抱えていた(Brocheux [2] pp. 48-49)。植民地政府はデルタの無主地を国有地とした上で、その土地を多くの場合無償でベトナム人やフランス人の大地主に払い下げた。こうして所有権が明確になった土地の開墾は、実際には大地主が小作人に資金や物資を前貸ししながら開墾を委託したり、開墾面積に応じて出来高賃金を支払ったりする形で進められ、地主・小作関係の存在を前提にしながら、その関係をさらに広い水田面積の上に押し広げる形で進められた。この新たな小作人は、北部からの漂流者や零落した自作農から補充されていた(Brocheux [2] p. 109, 122-124)。また、生活や営農のための資金に不足する多くの小作人は、家畜、種子、飯米、現金を前借りする契約を大地主やその代理人とあらかじめ結びながら年々の耕作に入っていた。このように地主・小作関係は、一面では、農地の外延的拡大と開墾された農地を維持する枠組みとしても機能していた。そしてこのような相互依存関係を背景に、両階級間にはある種の連帯感すら醸成されていたとも言う(Brocheux [2] pp. 112-114)。だが、小作人が資金不足に陥る要因の一つとして、彼らの地主に対する小作料支払いや、前借りの利子支払いが重くのしかかっていたことは疑いない。1920年代後半時点の8カ月間にわたる生活・営農資金の前借りの利率は、40%を下回ることは決してなかったとされている(Brocheux [2] p. 81)。そしてこのような高利貸しと抵当流れは、大地主が土地を集積する手段でもあった。また、地主・小作関係は、植民地期デルタの稲作技術の停滞要因でもあった。一部の在村地主が、徴収した小作料の一部を新技術の採用に投資することもあったようではあるが(高田他 [21] p. 61)、多くの大地主、特に不在地主は、技術革新に対し低い関心しか持たなかったからである(Brocheux [2] p. 66)。大地主はむしろ、精米、米穀卸、運送といった商工業事業の経営や、そこに資本参加する方に熱心であった(Brocheux [2] p. 117)。

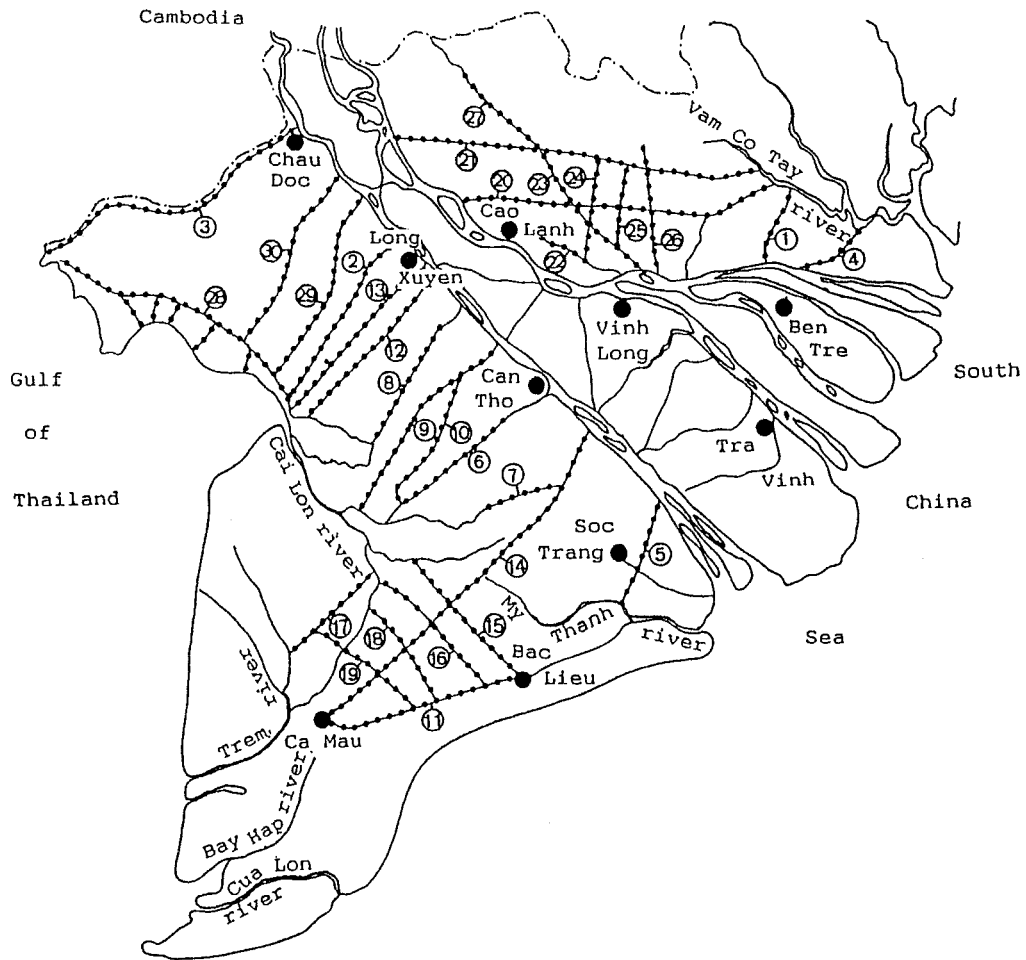
なお、1913年にはカントー市に稲作研究所が設立され、収量向上を目的に優良品種の選抜とその農民への配分に取り組み始めた。この点は、農学による科学技術とその適用がデルタの稲作生産力の向上に寄与し始めた嚆矢として記されうるが、この時点では目立った結果を残すことができなかった(Brocheux [2] p. 60, 64)。在来農法を大きく変革する力を持つ品種の登場、そしてその普及を可能とする土地制度の変革には、1970年代を待たねばならないのである。

植民地期のデルタの開発は、1920年代後半に未曾有のブーム期を迎えた後、大恐慌期以降は低迷し続けた。その結果、特に条件の厳しいドンタップ平原、カマウ半島のウーミンの森、カンボジア・ベトナム国境地帯の残丘周辺と西側低地はフランス植民地期には処女地として残された(Tanaka [23] pp. 137-138)。

第2次大戦後のデルタ開拓は、先ず、ベトナム共和国政府によって進められた。多くの運河が開削され入植地が建設されたが、戦乱が続く中で都市へ強制移住させられる農民も多く、開拓は容易には進まなかった。その一方で、1970年代前半にベトナム共和国では「土地を耕作者へ」政策のもと農地改革が実施された。その際、15haが地主の農地保有上限面積とされ、それ以下の場合も自作の場合に限って農地保有が認められた。さらに有償で国に接収された農地は3haを上限として小作農民に無償で譲渡された(Embassy of Viet-Nam [7] pp. 26-28)。その結果、メコン河デルタでは地主的土地所有が一掃され、農民的生産力の発展を可能とする農地制度的条件が整備されたと言える。こうした中、1970年頃からティエン河沿いの村でIR5やIR8の近代品種の作付けが始まった(Sanh [18] p. 33)。

1976年の南北統一直後に、メコン河デルタでは政府による農業集団化が進められた。しかしそれは、混乱による農業生産の停滞をもたらしたために徐々に軌道修正され、次いで1980年代末以降はドイモイ政策のもとで家族経営の生産に戻った。1988年土地法とその1993年改正法は、農民による安定的な農地保有を認めたので、その下で農業生産が急速に向上した(注5)。だが、統一直後の混乱のもとでも、中央政府による灌漑機能を備えた運河の開削、開墾、入植事業が進められてきた。

特に、ドンタップ平原は葦の原と呼ばれてかつては酸性土壌の不毛な湿原であったが、1960年代から大規模に運河が開削されて開墾が始まり、統一後は積極的な入植幹旋が行われて、高生産力の大規模水



- |                               |                                |
|-------------------------------|--------------------------------|
| a. Stage from 1705-1858       | (16) Phuoc Long canal          |
| ( 1) Bao Dinh canal           | (17) Chac Bang-Song Trem canal |
| ( 2) Thoai Ha canal           | (18) Pho Sinh-Gia Rai canal    |
| ( 3) Vinh Te canal            | (19) Huyen Su-Hoi Phong canal  |
| b. Stage from 1858-1975       | (20) Thap Muoi canal           |
| ( 4) Cho Gao canal            | c. Stage from 1975 to 1994     |
| ( 5) Saintard canal           | (21) Dong Tien canal           |
| ( 6) Xa No canal              | (22) No.1 canal                |
| ( 7) Lai Hieu canal           | (23) No.4 canal                |
| ( 8) Thot Not-Thi Doi canal   | (24) No.5 canal                |
| ( 9) Thoi Lai canal           | (25) No.7 canal                |
| (10) O Mon canal              | (26) No.12 canal               |
| (11) Bac Lieu-Ca Mau canal    | (27) Phuoc Xuyen canal         |
| (12) Rach Soi-Vam Cong canal  | (28) Rach Gia-Ha Tien canal    |
| (13) Tron canal               | (29) Ba The canal              |
| (14) Quan Lo Phung Hiep canal | (30) Tri Ton canal             |
| (15) Ngan Dua canal           |                                |

第1図 メコン河デルタの運河掘削  
出所) Chiem [ 5 ] p. 156.

田が広がる穀倉に生まれ変わった。

### 3 フランス植民地期から1960年代までの水稲作方式

2で見たような国家事業としての水稲作生産力形成過程と密接に関連しながら、メコン河デルタでは、農民の生産力向上に向けた取り組みが、地域毎にユニークな様相を呈しながら展開してきた。

フランス植民地時代に確立し、1960年代まで広範に見られた伝統的な水稲作方式は、何れも感光性で180–210日の成育期間を持つ在来種を用いた年1回作であった。伝統的水稲作は、デルタの農民達が、地主的土地所有の重圧下にも関わらず、先に見た地域的に多様な自然条件に対して見事に対応した結果として編み出し確立してきたものである。そこには代表的な三つの方式（浮稲栽培、2回移植法、1回移植法）を認めることができる。以下ではこれらを順に考察するが、農民的創意は、品種選択、作型選定、栽培技術選択の面で顕著に認めることができる。なお本節で採用した地域区分は、Chiem [4] pp. 346–356に示された1970年代初頭における伝統的水稲作方式の地域区分に従っている（注6）。

#### (1) デルタ上流部

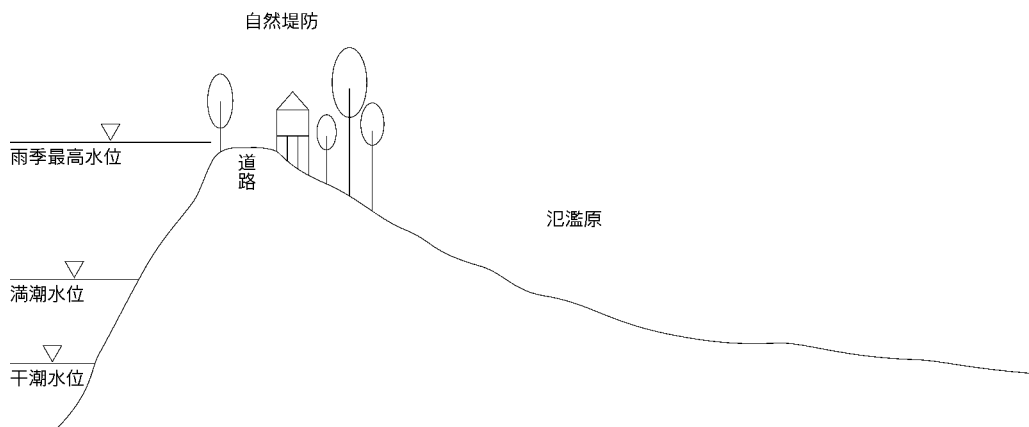
デルタ上流のチャウドック、ロンスエン地域では、雨季になるとメコン河の水位が上がり、大量の水が自然堤防を越えて溢れ出す（第2図）。氾濫水は最も深い年には4–5mにも達する。フランス植民地時代に、デルタ上流部の農民達はこの氾濫原の後背湿地に浮稲の栽培を普及させて、水田面積を一挙に拡大した。浮稲栽培では、洪水の水位の上昇に対して急速に茎を成長させて対応することができる浮稲の品種特性が利用される。

伝統的な浮稲の栽培方法を次に説明しよう（この段落の記述は、Chiem [5] pp. 347–350、金論文、国際農林業研究センター[15]pp. 55–56による）。まず4月に、最初の降雨の後に水牛で「田」（注7）を軽く耕耘し、同時に播種する。稲は、8月中旬に河川からの氾濫水がつくまでは雨水で成育する。その後、氾濫水や雨で「田」の水嵩が徐々に増すにつれ浮稲の草丈も伸びる。また、茎にある節から根が伸びて水中の養分を吸収する。雨季が終わる頃、稲は短日に感応して出穂し、その後登熟する。栽培期間中に施肥や防除は行わない。12月になって水が退くと稲は「田」に横たわる。収穫は翌年の1月に *vong gat*（第3図）と呼ばれる鎌を用いて穂の下20–30cmの稈を刈り取る方法で行う。収量は籾1–2t/ha程度である。脱穀は水牛に踏ませて行う場合もあるが、一般には農民が圃場で *than bo* と呼ばれる穀打板に稲束を打ちつけながら手で行う。脱穀された籾は水牛が牽引する轆で家に運ばれる。稲の切り株は圃場で燃やされる。なお、収穫後のこの一連の作業の内容は、以下に見る、他の伝統的な水稲作方式にも共通するものである。

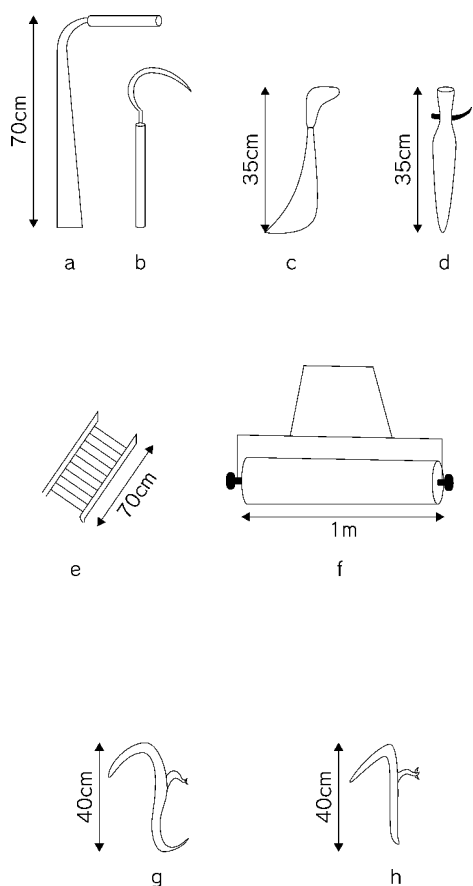
浮稲の栽培面積は、かつては25万haもあったが、1970年代以降に水利の整備が進んで激減し、90年代後半時点では1万8千ha程がアンジャン省チャウフー県に残っているにすぎない（Sanh et al. [18] p. 41）。

#### (2) デルタ中流部

デルタ中流部のカントー、ビンロン、サデック地域は、上流域と較べて雨季の洪水は緩やかで、浸水0.5–1mほどである。この地域では、河川や運河の水位が南シナ海の潮汐の影響を強く受けて大きく日変動する。また、氾濫水が運んでくる養分と永年性



第2図 中流域氾濫原の横断面図



第3図 伝統農具

a) Phan b) Cu neo c) Dao bung lua d) Noc  
e) Than bo f) Truc g) Vong gat (ベトナム型)  
h) Vong gat (クメール型)  
出所) Chiem [5] p. 351.

雑草に由来する有機分のため土壌肥沃度の非常に高い地域でもある。この地域の農民はこのような自然条件に対応しながら、次のような不耕起・除草・2回移植によって特徴づけられる独特な水稲作方式＝2回移植法を伝統的に取り入れていた。

2回移植法では、まず、雨季初めの5月末に、家の周辺を除草して拵えた陸苗代で、苗を育てる。苗代を作った後で、本田内の低所を *phan* または *cu neo* と呼ばれる農具を用いて除草する。この低所が安定的に浸水した時点で、30–40日苗を株ごと苗代から引き抜き、本田への第1回目の移植を行う。移植には *noc* と呼ばれる農具が用いられる。そこで60–75日間養成して大苗に育てたのち、9月に本田全面が安定的に浸水した時点で再び苗を今度は本田全面に移植する。この第2回目の移植の前に、農民は、本田内の、まだ苗が植えられていない残りの部分を除草する。2回目の移植は水位の上昇に応じて田内の低所から高所に向けて行われる。苗を掘り出

すためには、*dao bung lua* と呼ばれるナイフが用いられる。移植のタイミングを間違えなければ大苗は順調に成育し、やがて短日に感応して穂をつける。2回移植法では施肥・防除は行わない。2回目の移植田1haに対し、1回目の移植田30a、苗代130m<sup>2</sup>、種子40kgとされる。水が引くにつれて稲は倒れてくるが、茎は頑強に起き上がり、登熟が進む。収穫は翌年の1–2月に *vong gat* を用いて行われる。籾の収量は2t/ha程度である(この段落の記述は、Chiem [5] pp. 350–354, 金論文, 国際農林業研究センター [15] p. 56による)。

なぜ2回も移植するのであろうか。2回移植法は雨季始めの不安定な水条件に適応するための水稲作方式であることは間違いない。すなわち、農民は2回移植することにより、雨季始めに水不足のリスクが高い田内高所への作付けを避け、比較的安定的に水が得られる低所から利用することができるのである。南シナ海の潮位変動の影響を受けて田の水位も大きく日変動する状況のもとで、田内高所に安定的に水がついて第2回目の移植を行うべき時期の適切な見極めが、2回移植法で高収量をあげるうえでの要諦と言える。

### (3) 大凹地地域

大凹地地域はデルタ西部の中流域氾濫原の奥とカマウ半島を含む。ここはメコンの水系から遠く離れており、その氾濫水も届かない。この地を流れるクアロン、オンドックといった小河川には乾季になるとタイランド湾から塩水が遡上し、またこの地の土壌も塩分を含むようになる。作物の栽培は大量の雨水がこうした土壌塩分を洗い流す時に可能となるが、幸いにもこの地の雨季の降水量は、先に見たようにデルタ内の他の地域と較べて多い。しかしその一方で、この多量の降雨に、海拔0.5–1mの低地ゆえの排水の悪さが相まって、この地の多くは、放っておくと永年的な侵水地となる。実際、19世紀まではこの地は大半が不毛な沼地であった。その耕地化のためには排水事業が必要であったが、19世紀末以降にこの広大な凹地に幹線運河をひいて開拓事業に着手したのはフランス植民地政府であった。その時に掘削された運河は排水路及び交通路として機能し、またその両岸に人間の居住地を提供した。さらに開拓者は運河につなぐ小水路を自ら掘り進んで、浸水地を水田に変えた。しかし、開かれた水田には灌漑施設がなかったため、そこでは、以下に見るような、晩生種による水苗代・不耕起・除草・1回移植によって特徴づけられる天水稲作＝1回移植法が



営まれていた。

この方式では、まず、農民は、水苗代用地の草を手で引き抜く。続いて、毎年7月にやってくる大雨の後で、水浸しになった苗代用地を *truc* と呼ばれる木のローラーを人力で牽引しながら床締めし、そこに播種する。その後、圃場の苗代以外の部分を *phan* を用いて除草し、移植に備える。播種後60日経った時点で、農民は苗を圃場全体に *noc* を用いて移植する。苗は天水に依存してさらに成育し、雨季が終わって田の水が退き始める11月頃に開花する。収穫は翌年の1-2月に *vong gat* を用いられる。施肥は行われない（この段落の記述は、Chiem [4] p. 354 による）。

#### (4) デルタ下流部沿岸複合地域

南シナ海に臨む河口部の沿岸複合地域では、砂丘とその斜面の土地で、クメール人が古くから地下水を利用したため池によって、稲、野菜などを栽培していた。一方、新参のキンは、海岸平野や堤間湿地に19世紀から20世紀初頭にかけて水田を開発した（高田[20]）。ここでは洪水が起こらないので、伝統的に天水稲作が行われてきた。また、乾季になると田に塩分が侵入してくるので、品種は、早いうちに刈り取ることができる早稲種が用いられていた（(4)の以下の記述は、Chiem [4] p. 355 による）。

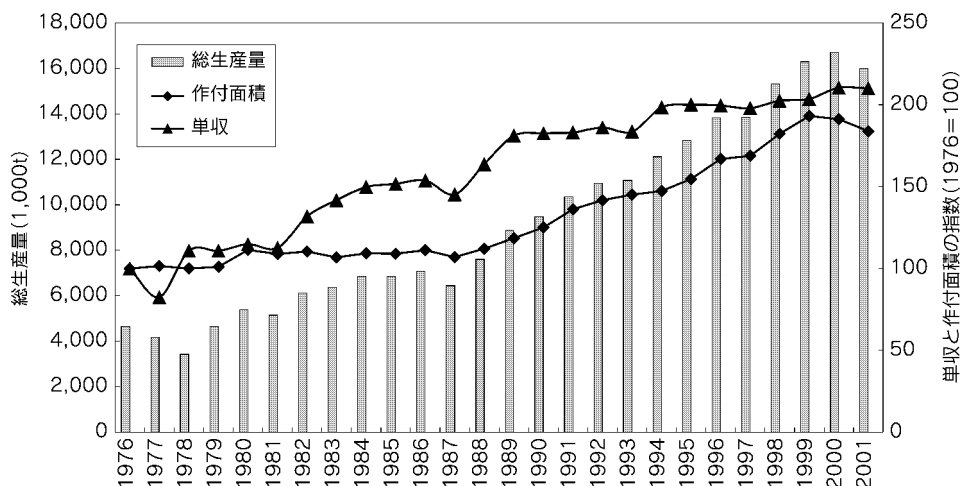
堤間湿地では、栽培される品種が早稲種で収穫の時期が12月末頃になる点を除き、先に見た大凹地地域と同じような、水苗代・不耕起・除草・1回移植による水稲作が行われてきた。

その一方で、海岸平野の稲作は、1回移植ではあるが陸苗代を準備し、耕耘を行う点で堤間湿地稲作

と異なる。そこでは、農民は、雨季の到来とともにまず本田を水牛で軽く耕耘する。続いて、7月末に家の周辺に陸苗代を準備する。9月中旬に移植を始めるが、移植の2日前には水牛で本田の代掻きを行う。移植は *noc* を用いて行い、田内の低所から始めて水位の上昇に応じて徐々に高所に上がってゆく。その後、稲は天水に依存して成育する。収穫は、12月末に *vong gat* を用いて行う。施肥は行わない。

#### 4 1970年代以降の水稲作方式

3で見たような伝統的な水稲作方式は、最近では水利の整備が進んだために一部の地域を除いてほとんど見られなくなった。1970年代以降、デルタの多くの地域で水稲作の様相を一変させたのは、非感光性で100日以下の成育期間を持ち、高収量によって特徴づけられるIR系近代品種の導入である。この近代品種とともに、水稲の2-3期作化、農薬・化学肥料の使用、簡易ポンプによる灌漑の普及が進んでいる。また、水路や土手の建設が急ピッチで進んでいる。幹線水路、2次水路の建設は公営事業であるが、末端水路の掘削や水田を取り囲む土手の建設は農民自身の労働と資金によって行われている。後に見るように、近代品種による稲作でも天水に依存している地域もあるが、これはむしろ少数である。Vietnam Living Standard Survey (VLSS) によると、メコン河デルタでは、1年生作物用の農地のうち灌漑されている部分は1993年に既に41%に達していたが、98年には90%にさらに向上した（GSO [9] p. 154, GSO [10] p. 218）。以上で述べたことによって米の収量は倍増し（第4図）、1989年以降はその輸出も行われるようになった。また、近代品種は



第4図 メコン河デルタにおける籾生産量の推移

資料：General Statistical Office [11], [12], Cuc [3], Tong Cuc Thong Ke [24].

苗立ちがよく直播に適しているため、従来は移植が行われていた所も直播栽培に変わった。そのためデルタの農作業風景は一変してしまった。

近代品種の作型や栽培方法も、地域的に非常に多様な様相を呈している。以下では、それぞれ特徴を持つ、ドンタップ省、カントー省及びロンアン省の稲作を紹介しよう。なお、今日のメコン河デルタでは、水稲作と他作物（緑豆、砂糖黍、ジュート、ヤム芋、パイナップル、豚、アヒル）の栽培・飼育さらには養魚（魚、エビ）、植林（カユプテ）との組み合わせの中にも、農民の創意が発揮された非常に興味深いものが多い。特に水稲作、養豚、養魚を一つの経営の中で統合させて各部門間に物質循環を作り出すシステムは、ベトナム語で耕地、池、畜舎を示す単語の頭文字を組み合わせる VAC システムとも呼ばれ、現地の農業関連機関が推奨しているために関連する研究も多い（注8）。だが以下では、水稲作の方式に限定して論述する。

#### (1) デルタ中流部カントー省オモン県の近代品種 2-3 期作

まず、カントー省オモン県で観察された水稲作を概説しよう。オモン県では、以下に見る潮汐を利用した灌漑によって乾季でも河川から田に水を引くことができ、また排水路も整っているため、比較的早い時期から3期作が普及した（(1)の以下の記述は、国際農林業研究センター [15] pp. 58-60 による）。

ここでは、水路の水位が南シナ海の潮の満ち引きによって日変化することを利用した水管理が行われている。農家は、満ち潮の影響で水路の水嵩が高くなった時に圃場に設置してある水門を開けて入水し、排水したいときには水嵩が低くなった時にその水門を開ける。このような潮汐を利用した灌漑による水管理を可能とするためには、田は土手によって囲われていなければならないし、さらにその土手は水門を備えている必要がある。1区画の広さは1-10 ha と幅が大きい。なお現在では、ボート用エンジンでポンプを駆動しながら水管理を行う農家が増えてきている。

冬春作（乾季作）は氾濫水が退き始める11月に始まる。3期作を行う場合には、排水路が整備されている圃場を動力ポンプで強制排水する。2期作の場合には水門を閉めて自然に水が落ちるのを待つことができる。その後、湛水中に繁茂したスイレン等の雑草を取り除く。そして田に水を少し入れて水牛や代掻き車輪をつけた耕耘機で表面を軽く耕耘する。その後、水を落として11月中旬にばらまきで発芽刷

を播く。次に田に水を入れ、収穫前まで湛水状態にする。刈取りは2月中下旬に鎌で行う。脱穀は農家が所有する脱穀機で行われる。籾は庭先や路上で天日乾燥する。乾季の好天と病害虫の少なさが幸いして籾収量は5-6 t/ha に達する。

3期作を行う場合には次の春夏作（1回目雨季作）の準備を急がなくてはならない。藁は乾季でよく乾燥しているので、多くの農家はそれに火をつけて燃やす。その後、水を入れて表面の代掻きをしてから播種するが、急いでいる場合には不耕起で播種する場合もある。2月中に播き終われば5月に収穫することができる。籾の収量は3-4 t/ha 程度である。引き続き5月中に夏秋作（2回目雨季作）の播種をする。その収穫は9月で、田に氾濫水が溢れ出す前に全ての作業を終える。2回目雨季作の籾の収量は3 t/ha 程度である。

2期作の場合の夏作（雨季作）は、乾季作の収穫後に田を耕起・代掻きする。播種は雨季の到来を待つて4月末から5月初めに行い、8月に氾濫が始まる前に収穫する。2期作の雨季作では、3期作の雨季作と較べて籾の収量は高く、4.5 t/ha 程度である。

#### (2) デルタ上流部ドンタップ省ドンタップ平原の近代品種 2 期作

ここで紹介するのは、1990年代前半頃のドンタップ平原における水稲作の状況である。

ドンタップ平原は酸性土壌の低湿地である。9月には洪水の最大水深が2 m に達し、一面が浅い湖の観を呈する一方で、雨季の最初の4カ月間（4-7月）は田に氾濫水がつかない。ここでは、夏秋作（雨季作）は天水のみに依存して行われていた。その一方で冬春作（乾季作）は、洪水の淀み水で行われ、*sangam*（水中での播種）の呼称があるベトナムではドンタップ平原に特有の方法であった（次の2段落の記述は、Chiem [4] pp. 363-364 による）。

夏秋作では畑苗代が作られていた。雨季がやってくると、4月末に *phan* で除草した後、鉄の車輪をつけた耕耘機で表面を代掻きしていた。耕耘の翌日に25日苗の移植が行われる。収穫は8月初めであった。水位が高い時期を避けて稲を水害から防ぐため、できるだけ早い時期に田植えを行うのが収量をあげるコツであった。収穫後しばらくは、田は洪水の中に放置されていた。

冬春作は、11月に雨季が終わって田から水が退き始めるが、なお20-30 cm の水がある時に取り組みが始まっていた。農民は鉄の車輪をつけた耕耘機で表面を代掻きした後、水の濁りが沈殿して透明にな

るまで2-3日待った。その後、発芽籾を湛水直播していた。稲は移植直後の1-2週間は水中で成育した。収穫は翌年の2月であった。

このようなドンタップ平原の *sa ngam* に象徴される水稲作は、田の灌漑・排水が不十分な状況のもとで展開していたものである。そのため、灌漑・排水設備が整備されてきた90年代後半以降には、ここで紹介したような水稲作は、オモンで見たような潤土直播による2-3期作に急速に取って代わられた(注9)。

### (3) 海岸平野部ロンアン省ホーチミン市近郊の近代品種+在来品種の2期作

この地域では乾季に塩害の影響を受けるため、乾季の米作りは困難である。また、雨季の洪水もないため、未だに多くの田で天水に依存した水稲作が行われている。

そのやり方は、まず、4月頃に雨が来た時点で近代品種による夏秋作(雨季作)の作付けが始まる。しかし、夏秋作の期間中も田の一部は在来種の水苗代用にとっておかれる。苗代の準備は夏秋作の開花の頃に始まる。8月頃に夏秋作を収穫した後で田の水が深くなるので、農民は *phan* で除草を行って切り株を払った後、丈の高い在来種の大苗(50-60日苗)を手植える。その収穫は2月頃に鎌で行われる。

## IV 結 論

前節で見たように、植民地期以降のメコン河デルタの水稲作は、降水量、地形、土質、洪水、潮汐の影響、河川における塩分遡上の面で多様性を持つデルタの自然条件のもとで、各地域で特徴的な様相を呈しながら展開してきた。これは、幹線運河の建設を軸に進められてきた植民地政府やベトナム国家による土木事業の存在を前提としながら、デルタの農民達が、地域固有の自然条件に対して独創的に対応してきた結果として編み出してきたものである。また、1970年代以降に近代品種が普及する過程では、新品種の現地適応性を高める試験研究機関の努力とともに、堤防・末端水路を構築するために行われた農民自身の投資・労働が重要な意味を持っていた。

このようなメコン河デルタの水稲作生産力の形成過程とその到達水準は、ニジェール河内陸デルタにおける水稲作におけるそれと比較する時、その差異が際立つ。後者では、未だに水利の制御が全くない氾濫原における浮稲栽培が主要な水稲作方式だからである。このような水稲作は、その大部分が今日な

お水田構築物や長期的投資を一切必要としない条件のもとで行われている。そして、ニジェール河内陸デルタで今日見られる管理された灌漑稲作では、そのために必要なインフラ建設は、そのほとんど全てが外国からの資金的・技術的援助に大きく依存する形で進められてきたものであって、農民自身による主導性や投資は今までは極めて限定的なものであったのである。(注10)

二つのデルタの間に見られる、このような水稲作生産力の形成過程とその今日的到達水準の、「格差」とも言うべき相違は、それぞれの地域で支配的な土地所有のあり方の相違を大きく映し出していることは疑いない。

メコン河デルタでは、19世紀前半にグエン朝が土地制度を確立したが、そこでは、土地の開墾者に対してその所有権を認める慣行的な観念が追認されていた(Brocheux [2] p.29)。すなわちメコン河デルタでは、グエン朝が土地制度を確立した時点には、私的土地所有の観念は既に通念として確立していたと言ってよいのである。もっとも、近年に下って、1970年代後半以降のメコン河デルタの土地制度は、人民的土地所有である。だが、1988年と1993年の土地法によって、農民は自分の農地に対し私的所有権に匹敵する強い権利を持つに至っている。

それに対して、ニジェール河内陸デルタで伝統的であり、そして今日においても支配的な土地所有のあり方は、アフリカにおける他の多くの農村と同様に、未だに共同体的土地所有である(注11)。そこでは、土地は、村落共同体の成員から「土地の主」または村長と見なされている一村民の所有物と観念されている。彼らは共同体による土地所有を人格的に体現する存在である。土地は「土地の主」または村長から農家に配分され、そのことによって農家はその土地の用益権を得る。農家は、配分された土地を相続することはできるが、その売買、質入れ、有償貸借は禁じられている。また、長期間にわたって(数年程度と言われている)土地が耕作されないなど、土地が用益権者によって適切に管理されていない場合には、その用益権を「土地の主」または村長に返上しなくてはならない。

以上から、メコン河デルタでは、私的土地所有と安定的な土地用益権のもとで、土地所有者による長期農業投資が早い時期から行われていたが、ニジェール河内陸デルタでは、共同体的土地所有のもとでの不安定な土地用益権のため、耕作者による長期農業投資が妨げられてきた、と推測しうるかもしれない(注12)。

しかし、このような土地制度面での相違が農地に対する長期投資のあり方の相違を規定してきたという推論は、実は、原因と結果を取り違えたものようにも見える。というのも、水稲作生産力の発展段階が安定的な土地用益権を要求するレベルに達しているようなところでは、土地に対する私的権利の観念が徐々に形成されてくると考えられるからである。すなわち、土地に対して開墾、地力の増進や灌漑設備のための投資が必要な所では、投資者が投資を回収して収益を取得することを保証するために、土地に対するある程度強い私的権利の実在が不可欠となってくる(注13)。この面から見ると、土地に対する私的権利の観念は、農業生産力のある一定の発展段階の産物である。また Iliffe [13] は、アフリカでは人口に対して土地が豊富であり土地が稀少財化していないために、土地の私的所有の観念が発達しなかった、と論じている。確かにニジェール河内陸デルタを含むモプチ地方の今日の人口密度18人/km<sup>2</sup>(1998年)は、メコン河デルタの422人/km<sup>2</sup>(2002年)と比して格段に少ない。また、前者の地方で冠水する耕作可能面積のうち、実際に耕作されているのは11%にすぎない、とのデータもある(DIRASSET [6] p. 2)。だが、農業生産力の発展段階が農地に対する投資を要求するレベルに達しているところでは、土地と人口との関係いかんによらず、土地に対するある程度強い私的権利の実在が前提となろう。実際、メコン河デルタで19世紀前半にグエン朝が土地制度を確立した時点では、デルタには広大な未墾地が残されていたのである。以上から、ニジェール河内陸デルタで私的土地所有の観念が今日充分に発達していないのは、その代表的農耕である水稲作では、今日なお水田構築物や長期投資を一切必要とせず、その農業生産力の水準は、そこに私的土地所有の観念を広汎に生み出すまでには未だ至っていないからである、と考えられる。そこで、このような、水田構築物や長期投資を必要としないニジェール河内陸デルタの水稲作に見られる農業生産力の特徴は、一体何に淵源するのか、ということが次に問題となろう。そこで、最後にこの点につき仮説的に3点指摘して、本稿の結びとする。

第1に、ニジェール河内陸デルタの農地は、もともとが半砂漠の土地なので、開墾のための初期投資をほとんど必要としない。メコン河デルタではそれとは大きく異なり、開墾のためには生い茂るカユブテやマングローブの木を伐採することが必要であったし、排水の悪い土地では排水路を掘削する必要があった。すなわち、後者では開墾のために相当の初

期投資を必要としたわけである。

第2に、西アフリカの稲作は巨大な氾濫原の律動の中から生まれたもので、水管理の発想を20世紀になってヨーロッパ人が持ち込むまではそもそも欠落させながら展開してきた。東アジアでは、日本の谷地田のように、小河川の水を利用した谷沿いの農民的灌漑が非常に長い歴史を持っていることが知られている(渡部 [25] 第4章)。だが西アフリカの稲作では、特有の自然条件のもとでこのような形の農民的生産力は展開する基盤を欠いていたのであろう。その一方で、ニジェール河内陸デルタ地域には8世紀から16世紀にかけてガーナ、マリ、ソングイの諸王国が興亡したが、それらは国家的事業としての治水の観念に至ることはなかったとされている(Gallais [8] p. 96)。西アフリカの諸王国の主な存立基盤は農業生産にはなく、金や塩の交易にあり、そこで発生する余剰に寄生しながらそれに課税することで成り立っていたとされている(注14)。この点は、たとえばメコン河デルタ開発を行った19世紀のグエン朝のように、東アジアではいくつかの古代・中世国家が大規模灌漑施設の施工・運営を通じて「アジア的専制主義」とも呼ばれる中央集権制を練り上げていたのとは大きく異なる、西アフリカ諸王国の特質である。このように西アフリカ稲作では、その揺籃地の独特の自然条件が災いして、水利面では農民的生産力も国家的土木事業による生産力も、伝統的には充分に発達しなかったと言えるのである。

第3に、西アフリカの稲作が、ある種の「有畜農業」である点も特筆されるべきである(注15)。稲を収穫した後の田は牛、羊、山羊、馬、驢馬、駱駝の放牧地となる。これら有蹄類が水田の中を闊歩しながら畦畔を破壊することは、外国からの援助で水田を整備してきたニジェール河公社で現に大きな問題となっている(Bonneval. et al. [1] pp. 11-64)。こうした事情も、そこで水田構築物に対する投資を妨げてきた要因の一つであるが、この点は収穫後の水田で放牧が行われなかった東アジアの稲作とは大きく異なる事情であり、西アフリカ稲作を歴史的に特徴づけてきたものの一つである。

## 注

- 1) 2006年に出版される予定の拙著が、このテーマに捧げられることになっている。
- 2) 筆者は1996-97年に国際農林水産業研究センター長期在外研究員としてカントー大学に滞在した。その後、1998-2002年には年に3回のペースでメコン河デルタ地方を短期訪問した。

- 3) 「労働の生産力は、いろいろな事情によって規定され、とりわけ、労働者の熟練の平均度、科学とその技術学的応用可能性との発展段階、生産過程の社会的結合、生産手段の規模とその作用能力によって、さらには自然諸関係によって、

規定される」(Marx [16] p. 68)。このマルクスの生産力規定要因と筆者の本文における水稲作生産力要素との対応関係を示すと次のようになる。

Marx	筆者
自然諸関係	原生的要素
労働者の熟練の平均度、生産過程の社会的結合	主体的-社会的要素
科学とその技術学的応用可能性、生産手段	客体的-社会的要素

なお、筆者の、原生的要素と社会的要素の区分は、労働生産力を原生的生産力と社会的生産力に分析した綿谷 [26] の理解を踏襲したもののだが、筆者はさらに、社会的要素をその主体的要素と客体的要素に分解した。

- 4) 高田 [19] p. 248 に記載されているコーチシナ西部と中部の数値の合計値。
- 5) 筆者自身による、統一後のベトナム農業と農政の展開過程についての要約は、Yamazaki [27] 第1章。
- 6) 筆者による Yamazaki [27] 第2章におけるメコン河デルタの農業地帯区分は、1990年代中葉における経済的視点からのものである。
- 7) メコン河デルタの浮稲栽培は、ニジェール河内陸デルタの自然冠水灌漑方式に相等するものである。その農地には人工構築物が存在しないため、これを特に「田」と表記する。
- 8) 例えば、国際農林業研究センター [15]。
- 9) この段落の記述は、Nguyen Quang Tuyen 氏 (カントー大学メンコンデルタファーミングシステムズ R&D 研究所) からの私信による (2004年12月2日付)。
- 10) ニジェール河内陸デルタにおける水稲作方式についての筆者の概説は、山崎 [28]。
- 11) 1960年に独立した直後のマリ国政府は中国を手本とする社会主義路線を標榜し、全土の国を宣言した。しかし、その後の経済危機のもとでマリはフランス・フラン圏に復帰し、さらに1968年のクーデタで成立した軍事政権は前政権の路線を大きく軌道修正してゆく。このような激変の一方で、農村地域では、制度上は今日に至るも土地国有が維持されてきている。だがこの土地国有制は、実際のところ社会生活の表に出てくるのがほとんどないものである。農村の現実生活を支配しているのは、農地を巡る慣行的な所有権や用益権である。また、イスラムの伝統から国によって土地税が課されること

もない。

- 12) アフリカの農業停滞の元凶をその共同体的土地所有に見るのは通説となっている (吉田 [29])。
- 13) 櫻井 [33] p. 242 は、既往文献の検討に基づき、サブサハラ・アフリカでは、「慣習的な土地制度」のもとでも土地への中・長期的な投資が行われ、さらにその投資が土地の所有権を強化する傾向がある、としている。さらに p. 247 では、コート・ジボワールにおける自身の調査データを用いた相関分析から、前者の命題を検証している。
- 14) 川田 [14]、宮本他 [17] 第5章。なお、竹沢 [22] は、稲作がマリ、ソンガイ両国の経済的・社会的基盤の一つであったとしている。また、竹沢他 [30] は、フォニオ栽培、鉄製造と、ガーナ、マリ成立との関連性を強調している。
- 15) 中尾 [31] pp. 111-113 は、ニジェール河内陸デルタ地方を含むサバンナ農耕文化圏の耕作法は手鋤農法として発展し、家畜の糞の利用もあまり進まず、穀草式・二圃式というような方式も生み出さなかったとし、「その発生的弱点の一つは、家畜を欠いたことにある」としている。そして、西アフリカで今日重要な役割を担っている牧畜はコーカソイド系民族が伝えたものであるが、それが非常に低い発展段階のものであったために、この牧畜の伝播は西アフリカの農耕文化の発展に対してむしろ抑圧的に作用した、としている (中尾 [32] pp. 114-117)。

#### 引用文献

- [1] Bonneval, P., M. Kuper et J. P. Tonneau, *L'Office du Niger; grenier à riz du Mali*, Cirad / Karthala, Montpellier, 2002.
- [2] Brocheux, P., *The Mekong Delta: Ecology, economy, and revolution, 1860-1960*, Center for Southeast Asian Studies, University of Wisconsin-Madison, Madison,

- 1995.
- [ 3 ] Cuc, N. S., *Agriculture of Vietnam: 1945-1995*, Statistical Publishing House, Hanoi, 1995.
- [ 4 ] Chiem, N. H., *Studies on agro-ecological environment and land use in the Mekong Delta, Vietnam*, A dissertation for a doctorate submitted to the Kyoto University, 1994.
- [ 5 ] Chiem, N. H., “Former and present cropping patterns in the Mekong Delta” 『東南アジア研究』 31 卷 4 号, pp. 345-384, 1994.
- [ 6 ] DIRASSET, *Avant-projet de schémas régionaux d'aménagement et de développement; District de Mopti*, Mopti (Mali), 1994.
- [ 7 ] Embassy of Viet-Nam, *Vietnamese agriculture: A progress report*, Embassy of Viet-Nam, Washington, D. C., 1972.
- [ 8 ] Gallais, J., *Hommes du sahel; Espaces-temps et pouvoirs; Le Delta intérieur du Niger; 1960-1980*, Flammarion, Paris, 1984.
- [ 9 ] General Statistical Office (GSO), *Vietnam living standard survey (VLSS) 1992-1993*, Statistical Publishing House, Hanoi, 1994.
- [10] General Statistical Office (GSO), *Vietnam living standard survey (VLSS) 1997-1998*, Statistical Publishing House, Hanoi, 2000.
- [11] General Statistical Office (GSO), *Statistical year book 1999*, Statistical Publishing House, Hanoi, 2000.
- [12] General Statistical Office (GSO), *Statistical year book 2002*, Statistical Publishing House, Hanoi, 2003.
- [13] Iliffe, J. (1983): “*The Emergence of African Capitalism*” The Macmillan Press, London (北川克彦訳 『アフリカ資本主義の形成』 昭和堂).
- [14] 川田順造 『サバンナの手帖』 新潮選書, 1981.
- [15] 国際農林業研究センター 『変貌するメコンデルタ』 農林統計協会, 2001 年.
- [16] Marx, K. *Das Kapital Band I* (1867) (資本論翻訳委員会訳 『資本論』 第 1 巻第 1 分冊, 新日本出版社).
- [17] 宮本生興・松田素二編 『新書アフリカ史』 講談社現代新書, 1997.
- [18] Sanh, N. V., V. T. Xuan and T. A. Phong, “History and future of farming systems in the Mekong Delta”, V. T. Xuan et al. ed., *Development of farming systems in the Mekong Delta of Vietnam*, Saigon Times, Hochiminh, 1998.
- [19] 高田洋子 「メコン・デルタの開発」 池端雪浦編 『変わる東南アジア史像』 山川出版社, 1994 年, pp. 240-260.
- [20] 高田洋子 「海岸複合地形における砂丘上村落の農業開拓」 『東南アジア研究』 39 卷 1 号, pp. 10-40, 2001.
- [21] 高田洋子・ピエール＝プロシュ 「広大低地氾濫原の開拓史： 植民地期トランスバサックにおける運河社会の成立」 『東南アジア研究』 39 卷 1 号, pp. 41-69, 2001.
- [22] 竹沢尚一郎 「アフリカの米」 『季刊人類学』 15-1, pp. 66-116, 1984.
- [23] Tanaka, K., “Agricultural development in the Broad Depression and the Plain of Reeds in the Mekong Delta: Conserving forests or developing rice culture?”, 『東南アジア研究』 39 卷 1 号, pp. 137-150, 2001.
- [24] Tong Cuc Thong Ke, *So lieu thong ke nong nghiep 35 nam (1956-1990)*, Nha Xuat Ban Thong Ke, Hanoi, 1991.
- [25] 渡部忠世 『稲の道』 NHK ブックス, 1977.
- [26] 綿谷昶夫 「資本主義成立における農民層分解の古典的意義：『資本主義と自作農』 研究の端緒として」 『農業総合研究』 8 卷 4 号, 1954.
- [27] Yamazaki, R., *Agriculture in the Mekong Delta of Vietnam*, Aniane (France), 2004.
- [28] 山崎亮一 「ニジェール河内陸デルタの水稻作方式」 (投稿中).
- [29] 吉田昌夫 「東アフリカの農村変容と土地制度改革のアクター：タンザニアを中心に」 池野旬編 『アフリカ農村像の再検討』 (アジア経済研究所研究双書 N. 496, pp. 3-58, 1999).
- [30] 竹沢尚一郎, ママドゥ・シセ, 小田寛貴 「西アフリカ史のなかのメマ；ガーナ王国とマリ帝国を支えた経済活動」 『アフリカ研究』 66, pp. 31-46, 2005.
- [31] 中尾佐助 『栽培植物と農耕の起源』 岩波新書, 1966 年.
- [32] 中尾佐助 『農業起源をたずねる旅；ニジェールからナイルへ』 講談社, 1969 年.
- [33] 櫻井武司 「西アフリカにおける低湿地の土地所有制度と水管理技術への投資」 『農業経済研究』 76 卷 4 号, pp. 241-250, 2005.